

< ゴミを燃料として電気を作る >

現在日本の電力供給は、その56%が火力発電によってまかなわれており、そのうちの約20%が石油を、約30%が石炭を燃料としています。石油や石炭を燃やしてタービンを回転させ発電するこの発電方式は、地球温暖化の原因の一つである二酸化炭素を発生させます。そこで、石油や石炭に代わる燃料として「ゴミ」が注目されています。大阪府堺市では、わが国で始めて清掃工場組み込み型の高効率ゴミ発電施設として、平成9年4月から操業を開始した堺市クリーンセンター東第二工場で、1日460トンのゴミを処理し、最大16,500kwのゴミ発電を行っており、また埼玉県東部清掃組合第一工場（越谷市）でも、1日800トンの処理能力をもつ焼却炉で最大2万400kwの火力発電を行っています。



堺市クリーンセンター東第二工場

これらの発電施設で得られた電気は、工場内で使用されるほか、電力会社に売却されています。

いっぽう、発電用の熱源のほか、公共施設の冷暖房、給湯、温水プールの熱源として、燃やしたゴミを固め、固形燃料（RDF：Refuse Derived Fuel）化するといった取り組みも試行されており、実用化直前までのところに来ています。